

〇-5) 著明な cortical venous reflux を伴った海綿静脈洞部硬膜動静脈シャントの3例

江面 正幸・高橋 明 (広南病院血管内)
 藤井 康伸 (脳神経外科)
 吉本 高志 (東北大学脳研)
 (脳神経外科)

今回我々は、著明な cortical venous reflux を呈し、SPECT にて脳血流低下が確認された海綿静脈洞部硬膜動静脈シャント (CSdAVS) を3例経験したので報告する。

症例1は59歳女性、症例2は49歳男性、症例3は69歳女性、いずれの症例も複視・結膜充血などの眼症状を呈したが、その程度は軽微だった。症例1ではIPS、症例2ではSOV、症例3ではIPSが副次的な drainage として認められたが、いずれも main drainage はシルビウス静脈への cortical venous reflux であり、SPECT では reflux がみられる部分の血流低下が確認された。症例1・症例2では経静脈的塞栓術を施行、治療後眼症状は徐々に改善していき、SPECT 所見は正常化した。症例3も経静脈的塞栓術を予定している。

Cortical venous reflux を伴う CSdAVS では、これが顕著な場合には頭蓋内出血の危険性が高いため早期の治療が必要と考えられる。この際眼症状と臨床的切迫度とは相関しないので、治療の緊急性を判定するには、SPECT による脳血流イメージが有用と思われた。

〇-6) 巨大 venous pouch を伴った脳内 AVF の1例

池田 修二・桑山 直也
 野村 耕章・西嶋美知春 (富山医科薬科大学)
 遠藤 俊郎・高久 晃 (脳神経外科)

出血で発症し、巨大な venous pouch を伴った脳内動静脈瘻 (AVF) を経験したので報告する。【症例】42歳、男性。【主訴】突然の頭痛。【既往歴、家族歴】特記事項なし。【現症】平成5年12月14日、突然の頭痛を主訴に近医を受診した結果、脳室内出血と診断され、翌日当院に紹介入院した。【入院時所見】入院時意識は清明で、左同名半盲認めた。CT 上、右頭頂葉の一部器質化された多発性の占拠病変を認め、血管撮影にて右中大脳動脈 (MCA) および右後大脳動脈 (PCA) の皮質より巨大な venous pouch に流入する AVF と診断した。【経過】PCA からの流入動脈は血管内治療より polyvinyl acetate (D) を用いて完全に閉塞した。MCA からの流

入動脈は開頭により、術中血管撮影下にクリナップした。術後、新たな神経脱落症状は出現しなかった。追跡血管写にて MCA の流入動脈近位から側副路を介した血流が一部残存し、経過観察中である。

〇-7) クモ膜下出血にて発症した intradural true ophthalmic aneurysm の1例

染矢 滋・南出 尚人 (水見市民病院)
 村松 直樹 (脳神経外科)
 池田 清延 (金沢大学)
 (脳神経外科)

IC-ophthalmic aneurysm は、内頸動脈の眼動脈分岐より後交通動脈分岐部までのいわゆる ophthalmic segment に発生する動脈瘤である。今回、我々は、クモ膜下出血にて発症した眼動脈自体より発生した true ophthalmic aneurysm (以下 True OP AN) を経験したので報告する。

症例は69才男性。突然の頭痛、嘔吐あり救急車にて当科へ搬入された。頭部 CT にてクモ膜下出血を認め、脳血管撮影にて右眼動脈に内頸動脈より分岐後 6mm 末梢に直径 5mm の動脈瘤を認めた。Rt-cranio-orbital approach により動脈瘤クリッピングを行った。

True OP AN の報告は数例をみるのみできわめて稀である。Intra orbital ophthalmic aneurysm とは異なりクモ膜下出血にて発症する。硬膜外からの前床突起の削除と視束管開放がクリッピングに際し有用であった。

〇-8) 内頸動脈閉塞術後12年を経過して発生し破裂した同側 true posterior communicating artery aneurysm の1例

小笠原邦昭・沼上 佳寛 (石巻赤十字病院)
 関 薫・北原 正和 (脳神経外科)

脳主幹動脈閉塞後、閉塞血管領域の血流を補うため他の脳動脈に側副血行路として hemodynamic stress が加わる。こうした hemodynamic stress は脳動脈瘤の成因となりうるということが知られている。今回我々は頸部内頸動脈閉塞術後12年目に発生し破裂した true posterior communicating artery aneurysm の1手術例を経験したので報告する。症例は45才の女性。28才の時破裂前交通動脈瘤に対し根治術を受けたが、この時併存した右内頸動脈瘤に対し muscle wrapping が行われた。33才時この右内頸動脈瘤が破裂したため右頸部内頸動脈閉塞術及び右 STA-MCA 吻合術が行われた。今回は突然

の右動眼神経麻痺にて発症し当科を受診した。脳血管撮影では太くなった右後交通動脈を介し右 C1 及び A1, M1, が像影されていた。この右後交通動脈の脳底動脈より動脈瘤が認められた。入院7日目に破裂をきたしたため contralateral zygomatic approach にて neck clipping を施行した。動脈瘤は後交通動脈の屈曲部に発生しており動眼神経と強く癒着していた。内頸動脈閉塞後に発生する動脈瘤のなかでも true posterior communicating artery aneurysm は極めて稀と思われ報告した。

○-9) 脳動脈瘤術後、長期を経てクモ膜下出血をきたした未処置動脈瘤

市川 昭道・大塚 顕
 斎藤 隆史・本山 浩 (長野赤十字病院)
 鈴木 健司・松島 直子 (脳神経外科)

クモ膜下出血で発症した多発脳動脈瘤に対しては、出血源と考えられる動脈瘤を含め可能な限り根治手術が行なわれているが、種々の理由で全てが処置されるとは限らない。当科では過去6年の破裂脳動脈瘤クリッピング術151例のなかに、初回手術時に処置されずに、長期を経てクモ膜下出血をきたした6例を経験したので報告する。

症例の内訳は、女性5例、男性1例で、年齢は初回出血時41~53才(平均46.2才)、再出血時51~66才(平均57.8才)であった。破裂部位は、初回時は中大脳動脈瘤4例、内頸動脈瘤2例で、再発時は中大脳動脈瘤4例、内頸動脈瘤1例、前交通動脈瘤1例で、4例が mirror site の動脈瘤の破裂であった。

再出血時には3例が Hematoma type のクモ膜下出血を示し、術後の ADL も初回時 Excellent 4例、Good 2例が、再出血時には Excellent 1例、Good 1例、Fair 2例、Poor 2例と不良であった。脳血管写では、中大脳動脈瘤が他の部位の動脈瘤に比べ著しい増大を示した。

[結論] クモ膜下出血再発例は予後不良となるものが多く、高齢者を除く未処置脳動脈瘤は脳血管写を追跡し、早期に治療が必要と思われる。

○-10) 第3脳室開放を行った急性期破裂脳動脈瘤の手術成績

加藤 甲・飯塚 秀明
 横山 雅人・飯田 隆昭
 竹内 文彦・熊野 宏一
 鈴木 尚・中村 勉 (金沢医科大学)
 角家 暁 (脳神経外科)

急性期破裂脳動脈瘤手術における第3脳室開放の効果を検討した。【対象・方法】対象は1984年1月より1993年12月までにクモ膜下出血発症1週間以内に pterional もしくは interhemispheric approach で手術した Willis 輪前半部動脈瘤92例である。女性57例、男性35例。年齢は20~82歳(平均58.0歳)で、Hunt & Kosnik (H&K) による術前重症度は Gr. 1~2:37例, Gr. 3:29例, Gr. 4~5:26例であった。67例に終板を切開し第3脳室を開放(A群)、25例は非開放(B群)である。脳槽ドレナージは使用していない。【結果】A & B群の手術成績は各々良好 91.0% & 60.0%, 不良 3.0% & 24.0%, 死亡 6.0% & 16.0%, 脳室腹腔短絡術を要したのはA群4例(5.9%), B群6例(16.0%)であった。A群のH&K Gr. 1~3で転帰不良は1例のみだった。

【結語】急性期脳動脈瘤手術において、第3脳室の開放は脳脊髄液のクモ膜下腔への循環を促進し、症候性脳血管攣縮および正常圧水頭症の発生を減少させる効果があると考えられた。

○-11) 内頸動脈—後交通動脈分岐部動脈瘤と動眼神経麻痺

渡部 正俊・外山 孚 (長岡赤十字病院)
 小泉 孝幸・小股 整 (脳神経外科)

内頸動脈—後交通動脈分岐部動脈瘤(IC-PC An.)は、ときに動眼神経麻痺を合併し、症候性動脈瘤の代表的なものとして知られている。また、クモ膜下出血(SAH)発症時に麻痺が見られたり、clipping に合併症として麻痺をきたしたりする。1984年~1993年の10年間に手術された IC-PC An. と動眼神経麻痺の関係について検討した。

IC-PC An. は76例、うち unruptured An. は10例、ruptured An. は66例で、全動脈瘤の18%を占めていた。unrupture で麻痺があったもの3例、rupture で発症時に麻痺があったもの11例、clipping 後に麻痺をきたしたものの16例であった。その後は、unrupture の例と SAH 発症時から麻痺のあった14例中9例は6ヶ月以内に麻痺は軽快または治癒。clipping によって麻